OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	建築・都市景観の視覚形態評価解析に基づく都市景観形成計画の研究
Author(s)	奥, 俊信
Citation	大阪大学, 1989, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【44】

氏名・(本籍)	奥(おく)　俊信(としのぶ)
学位の種類	工学博士
学位記番号	第8806号
学位授与の日付	平成元年8月4日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**建築・都市景観の視覚形態評価解析に基づく都市景観形成計画の研究**
論文審査委員	(主査) 教授 紙野 桂人 (副査) 教授 岡田 光正　教授 笹田 剛史　教授 楢崎 正也

論文内容の要旨

都市空間の快適性，豊かさ，個性などを形成する上で，都市景観形成は重要である。現在，わが国の都市景観の大きな問題点の一つに，景観の無秩序や混乱があり，秩序化や調和が必要とされている。

本研究は，都市景観の中でも特にこの問題が典型的に現れている街路景観を主たる対象にして，まず景観要素の視覚形態特性を瞬間視実験によって明らかにし，次に景観と心理的評価の関係を心理学的実験と多変量解析によって明らかにしている。そして，この知見に基づき，都市景観のまとまりの良さを中心に都市景観形成の手法を検討している。

本論文は7章からなる。

第1章は序論であり，本研究の背景，目的，意義，方法を論じ，さらに本研究と既往研究の関係を整理している。

第2章では，都市景観のスライドを用いて瞬間視実験を行い，被験者のスケッチから読み取った視覚形態特性に基づいて都市景観構成要素の抽出と分類を行い，景観上の特徴を検討している。

第3章では，街路景観をモンタージュ法によって操作した景観スライドを用いて，まとまりの良さ，親しみやすさ，好みの3評価項目で評価させる実験を行い，街路景観と心理的評価の関係を分析している。このことにより，まとまりの良さ，親しみやすさ，好みについて都市景観形成手法の具体的，事例的な知見を得ている。また，まとまりの良さを中心に評価項目間の関係を検討している。

第4章では，第2章と第3章の実験結果を基に，まとまりの良さを中心に都市景観形成手法の一般化・理論化を目的として，街路景観と心理的評価の関係を多変量解析（双対尺度法と林の数量化理論Ⅰ類）によって分析している。さらに心理的評価項目間の関係についても詳細に分析している。

第5章では，都市景観にまとまりの良さを与える一般的・理論的方法の代表的なものとして，景観の細部要素をコントロールする方法と景観の枠組みとなる全体的要素をコントロールする方法が考えられるが，この二つの方法の効果を比較するため，都市景観として最小である建物が2戸連続している場合をモデルにして心理的評価実験と分析を行っている。

第6章では，まとまりの良さの評価構造をより詳細に検討するため，都市景観の様相の一つであるスカイラインを対象に，視覚形態的な複雑さについて心理的評価実験を行い，フラクタル理論による分析をしている。

第7章は結論であり，実験結果を既往研究との比較検討のもとに整理し，主としてまとまりの良さについて都市景観形成の手法を論じている。

論文の審査結果の要旨

都市景観形成計画の課題は，生活環境の質の充実を求める都市住民の意識に基づいて，近年その意義を深めつつあるもので，都市景観の視覚環境基準を明らかにし，これによって市街地における建設活動を規制・誘導して，環境秩序の形成を導こうとするものである。

本論文は，都市景観形成計画において，特に重要な役割を持つ街路景観を主たる研究対象とし，その景観構成要素及び視覚形態特性を実験的に明らかにし，その結果導かれた街路景観モデルの心理的評価実験を行って，街路景観評価の心理的構造を示し，さらに景観秩序形成の基本的問題を設定して，解明に取り組み，これらの研究結果を基礎として都市景観形成手法を論じたもので，その成果は次の通りである。

(1) 都市景観に関わる基礎的諸概念を整理検討し，既往の諸研究の位置づけを明確にしている。

(2) 瞬間露出法による視覚実験によって，景観構成要素の視覚形態特性を把握し，これに基づいて景観構成要素の抽出と類型化を行っている。

(3) モンタージュ法による街路景観の心理的評価実験を行い，景観条件と心理的評価の関係ならびに評価項目間の関係を明らかにしている。

(4) 街路景観と心理的評価の関係について，多変量解析を行い，都市景観形成の一般的手法の理論化を試み成果を得ている。

(5) 都市景観における，景観評価の最重要項目である良いまとまり（prägnanz）の形成手法を明らかにするために，群建築の連続景観のうち特にスカイラインの複雑さに関する評価実験を行い，フラクタル理論を適用して分析し，有意義な知見を得ている。

(6) 以上の成果を既往の諸研究成果に照らして比較分析を行い，成果の位置づけを明らかにするとともに，関連する建築・都市計画制度上の観点から考察を行い，本研究の実際的意義を明らかにしている。

以上のように本論文は，都市景観形成計画の理論的枠組みを明確にするとともに，独自の観点での研究を展開し，都市景観の規制・誘導の上で有効な多くの新しい知見を得たものであり，建築計画学の分野において貢献するところ大である。

よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。